

かさね (色彩間苺豆)

へ思ひをも 心も人に染めばこそ 恋と夕顔夏草の 消ゆる間近き
末の露 もとの雫や世の中の おくれ先立つ二道を へ同じ思ひに後
先の わかちしどけも夏紅葉 梢の雨やさめやらぬ へ夢の浮世と行
なやむ へ男に丁度青日傘 骨になる共何のその 跡を逢ふ瀬の女
気にこわい道さへやう／＼と へ互に忍ぶ野辺の草 葉末の露か螢
火も へもし追手かと身づくろひ ころろ関屋も後になし へ木下川
堤につきにけり

へこれ累思ひがけないこの所へ そなたはどうして来やうたぞ

へどうしてとは胴慾な 一緒に死のうと約束して お前一人

覚悟の書置 ころ迄慕うて来た程に 共に殺して下さんせ

へ切なる心は尤もなれど そなたの養父は御預りの 撫子の

茶入紛失故殿様の 御とがめ受けそれさへあるに 其方と

死んでは親への 不孝思ひあきらめ此処から早う帰つてたも

へ言ふ顔つくづく打まもり ひよんな縁でこのやうに 遂こうなつた

仲ぢや故 へ勿体ない事乍ら 去年の初秋うらぼんに 祐念様の御

十念 その時ふつと見染めたが へほんに結ぶの神ならで 仏の庭の

新枕 初手から蓮のうてなぞと へ心で祝ふ菩提心 後生大事の

殿御ぢやと へ奥の勤めの長つばね 役者びいきの噂にも どこやら

風が成田屋を お前によそへて楽しむ心 お年忘れに奥御殿 打交

りたる騒ぎ唄 へ入黒子いれぼくろ へ起請誓紙は反古にもなるが

五月六月は満更ほぐにも成りやせまい うたふ辻占今の身に あ

たりて私が恥かすと 後言ひさして口ごもる

へハテ是非に及ばぬそれ程迄に 思ひつめたる其方の心可愛いや

共に腹の子までこのまゝ殺すも世の成行 ふびんの者の心やなア

へ深き心をしらす玉の 露の命をわれ故に 思へばびんなき心やと

へ手を取交し歎きしが へせめて義理ある親達や 生みの親へもよ

そ乍ら 今宵限りの暇乞ひ 不孝の罪は幾重にも お許しあれと諸

共に 川辺に暫し泣き居たる へ不思議や流れに漂ふ髑髏 助が

魂魄錆つく鎌

へナニ俗名助

へエ、

へアイタァ、イタァアァーイタ…

へオゝさては死霊の

へアレー

へ与右衛門御用だ

へ暫し争ふ折柄に 風に流るゝひと節に へ夜や更けて 誠に文は
ねやの伽 筆のさや焚く煙りさへ 埒も中洲のしらむ東雲

へアゝもしお前どこへ行かしゃんすえ

へサアわしはヤそなたの顔は

へ何わたしの顔が

へおそろしい

へナニ恐ろしい恐ろしいはお前の心サ その文一寸見せて下さんせ

へこの手紙は

へ見せられまい見せられまいが ナアチエーお前はナア

へそれその様によそ他に 深い樂しみあればこそ わしをだまして胸
慾な へもしやにかゝる恋の慾 兎角浮世がまゝにもならば へ帯の矢
の字を前垂に 針打やめて落しばら へ駒下駄履いて歩いたら まこ
とに誠に嬉しかる ならぬ先まで思ふのも 今更身で身が恥しい む
ごいわいのと取ついで 変る姿を 露知らず 色をふくみし取りなりは
憐れにもまたいぢらしや

へ道理々々死ぬると云ふは皆いつはり 国へ帰参の此与右衛門

足手まとひとは思へども そなたを連れてこれよりすぐに

へそんなら一緒に

へサおぢや

へアイ

へいそく先へ たちまちに邪慳の刃 血汐の紅葉 竜田の川の瀬と
変る へ男の裾にしがみつ

へアーこりやわたしをだまして

へオゝ殺すのぢや

へエ、

へ仔細と云ふはこれを見よ

へ鏡にうつせば

へアレー ヤヤヤヤヤ… コこりやまあどうして此様に 私の顔
の力変りしはア

へこりや累因果の道理をよつく聞け 汝がためには実の親菊が
夫の助を殺したその報ひ 廻りめぐつてその顔の 変り果てた
も前世の約束 此与右衛門は親の仇 これも因果とサあき
らめて

へ成仏せよと無二無三 打つてかゝれば へ身をかはし へなふ情な
やうらめしや 身は煩惱のきづなにて 恋路に迷ひ親おやの 仇なる
人と知らずして 恠気嫉妬のくどき言 我と我身に惚れ過ぎし へ
心のうちの面なや つらき心は へ先の世の 如何なる恨みか忌しと

へ口説いつ泣いつ身をかきむしり 人の報ひのあるものか 無きものか
思ひ知れやとすつくと立ち 振乱したる黒髪は 此世からなる鬼
女の有様 へつかみかゝれば へ与右衛門も 鎌取直して土橋の上
襟髪つかんで一トえぐり へ情容赦も夏の霜 消ゆる姿の八重撫子
これや累の名なるべし 後に伝へし物語り へ恐ろしかりける次第
なり。